

## 日本膜学会第38年会開催報告

第38年会組織委員長 山口猛央

日本膜学会第38年会は、5月10日（火）、5月11日（水）に、早稲田大学西早稲田キャンパス63号館にて開催されました。5年連続で早稲田大学西早稲田キャンパスでの開催となり、場所を確保してくださった松方先生、瀬下先生に感謝いたします。

本年度は261名の参加があり、76名が参加した懇親会も大変盛り上がりました。年会参加者数は年々増えて来ましたが、今年も、過去二番目の参加者数でした。

発表に関しては、口頭発表は人工膜28件、境界領域7件、生体膜15件の合計50件、ポスター発表は人工膜51件、境界領域13件、生体膜7件の合計71件でした。121件の発表数も、過去二番目に多い数字となっています。学生賞の応募数は61件あり、13件の学生賞が選出されました。審査員の先生方、ありがとうございました。

特別講演としては、人工膜では東京大学の加藤隆史先生から「イオンや分子を輸送する液晶性自己組織化膜の構築」と題し、液晶を用いた新規な構造を持った新しい透過膜の紹介がありました。分子間相互作用を巧みに利用し、液晶分子配向、ナノ相分離により微細な構造を制御して、様々な水透過膜、イオン伝導膜、電子伝導材料に展開されており、通常分離膜とは構造も考え方も異なりとても参考になるとともに刺激的な内容でした。生体膜では、京都大学の梅田眞郷先生から「膜脂質ダイナミクスを介する細胞機能の制御機構」と題し、生体膜の脂質分子の動態と機能、筋芽細胞や昆虫細胞でのリン脂質分子の特異な役割をお話いただきました。生体膜での脂質膜の振る舞いは、人工膜と異なり柔らかくダイナミックであり、複雑な機能を担えることを教えていただきました。いつか、人工膜研究に生かせないかと考えています。どちらの講演も膜学会員にとって貴重であり、今後も、両先生に膜学会に参加いただき、膜研究の進展にご協力いただければ幸いです。

シンポジウムは、人工膜として「膜による水処理技術を展望するVII」と「無機膜が拓く新しいプロセス技術の展望IV」、生体膜として「新技術が切り拓く生体膜研究」、境界領域では「Hierarchical Membrane：動的構造と機能発現」の四つのシンポジウムが行われました。水処理に関しては、膜プロセスでの省エネ技術、バイオマスへの利用、予測モデルを用いた運転技術などが紹介され、無機膜では、膜支持体、新しいプロセス、水素透過膜に関する講演がありました。生体膜では、リン脂質代謝の解析、エクソソームの細胞内導入、ミトコンドリアNaCa輸送体、1分子イメージング技術による善玉コレステロール産生の解析に関する講演がありました。境界領域では、刺激応答ゲル、膜ダイナミクスと細胞信号伝達、分子認識ゲート膜、脂質膜での分子認識・変換など、境界領域らしい講演がありました。どのシンポジウムもオーガナイザーの先生によりよく練られ、膜学会員にとって重要な情報が提供される内容でした。

また、日本膜学会膜学研究奨励賞受賞記念講演として広島大学の金指正言先生より「シリカ系気体分離膜のネットワーク構造制御と透過性評価」と題し、シリカ膜の微細構造制御と分離性能の関係を明らかにする講演がありました。金指先生の今後の膜学会での活躍が期待されます。

さらに、口頭発表、ポスター発表でも、高いレベルでの膜学に関する発表および議論があり、特別講演、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表と、全てにおいて充実した熱気のある二日間となりました。参加して下さった皆様にお礼申し上げます。

最後に、一緒に学会を運営して下さった副組織委員長の岡村恵美子先生、学生賞選考委員長の大橋秀伯先生、てきぱきと指示を出して学会を乗り切ってくださった膜学会事務の杉山様、学会当日に会場準備を手伝ってくださった早稲田大学の方々、学会当日に会場準備と運営を手伝ってくださった東工大の皆さんに感謝申し上げます。どうも、ありがとうございました。



特別講演  
加藤隆史先生



特別講演  
梅田眞郷先生



ポスター会場風景



ポスター会場風景



シンポジウム風景  
(写真提供：甘利俊太郎さん)